

# 船井情報科学振興財団

## 報告書

織井理咲

University of Washington  
Paul G. Allen School of Computer Science & Engineering

2022年6月

University of Washington Paul G. Allen School of Computer Science & Engineering の博士課程の一年目が終了しました。今回は前回の報告書からの半年間を振り返り、夏の予定について書きたいと思います。

### I. 研究

以前の報告書では3人の教授と研究のローテーションをすると書きましたが、早めにローテーションを切り上げ、3月に指導教官を決めました。最終的には ICTD (information and communication technologies for development) を研究したいという気持ちが固まり、ICTD Lab に所属することを決めました。

この半年間で3つのプロジェクトに関わりました。

1つ目は、アフリカのコロナウィルスのデータの精度を評価するプロジェクトです。データの数値だけでは理解できないコロナに対する観点をアフリカ人とのインタビューを通して調査しました。

2つ目は、1月に受けた HCI (human-computer interaction) の授業で他の学生と始めたプロジェクトです。女性が自身の更年期の経験を記録して世代間で共有し合うための支援をするプロジェクトです。更年期を経験中、あるいは経験した女性をインタビューし、更年期に関する症状や感情を伺い、更年期中に経験されたことを記録し、次の世代に伝えることを促す手段をデザインしました。個人的に意味のあるプロジェクトでもあり、今後も女性の健康と経験にフォーカスする研究を続けたいと強く思いました。

3つ目は、5月に開始した、コンピューターサイエンス、グローバルヘルス、疫学の研究者とマラウイ (東アフリカの国) の保健省の人による共同研究プロジェクトです。研究目的は、マラウイの HIV 患者と医療従事者の現地で使われている電子医療記録システムに対する観点を理解することです。研究のために、今夏にマラウイにフィールドワークをすることになりました。フィールドワークで用いる研究方法はインタビューであり、最終的には調査結果を現地の保健省と医療従事者と共有する予定です。出発までの期間は、インタビューの準備を進め、マラウイの文化とクリニックについて勉強しています。コンピューターサイエンスのデパートメントでもこのような学祭的な研究に関わることができ、非常に満足しています。私の研究室は他国にフィールドワークに行く学生が多く、このような特殊な研究をメンタリングしてくださる先輩方がいてとても心強いです。

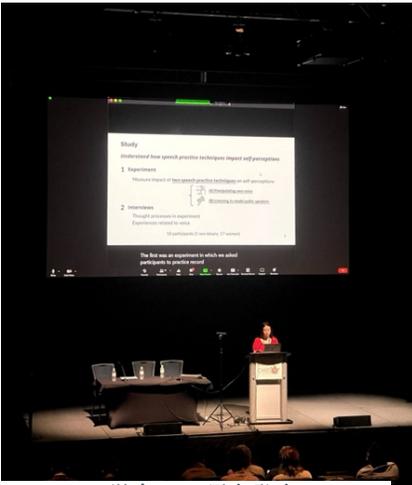
## II. 授業

冬学期に自分の専門分野である HCI の授業を受けました。HCI の幅広さを改めて知りました。毎週新しいテーマの論文を読んだ結果、普段は一人で読まないテーマ (定量評価による研究、インタラクションデザイン、オンラインコミュニティ等) をより理解することができました。最終的には定性的評価をもととするテーマに関心を持ち、女性の健康に関する研究プロジェクトを始めました (詳細は I のとおり)。

春学期は Data Visualization の授業を受けました。データのビジュアル化に使われるツールを使いながらデータの本質をわかりやすくかつ正しくビジュアル化する方法について学んだ結果、今後の研究 (特に論文に入れる図の作成) に応用できるスキルが増えました。

また、ICTD のリーディングセミナーにも参加しています。

### III. CHI (HCI の国際学会) での研究発表



学会での研究発表

4月末～5月初旬にニューオリンズで開催された CHI に参加しました。東京大学での研究で執筆した論文が採択されたため、研究発表を行いました。初めての対面の学会であるのに加え、久しぶりに人前に立つことになったのでかなり緊張しましたが、オーディエンスに上手く伝えることができたと思います。また、プレゼンテーションでは、スピーチのメモを見る機能が突然動かなくなるというバグニングに見舞われましたが、十分に準備した甲斐があり、落ち着いて発表することができました。学会では学部時代の指導教員、学部時代の友達、船井財団の同期の荒川君と再会できたのと同時に、憧れの研究者やオンラインでしかやりとりがなかった方々にも会い、多くの研究者とコネクションを作ることができました。また、学会に参加することによって HCI の分野の多様性を改めて実感しました。研究について学ぶことだけではなく、自分のコミュニティを広げることができ、博士課程一年目の学生として非常に貴重な経験を得ました。



ニューオリンズ

### IV. ICTD/COMPASS の合同学会

6月末に ICTD と COMPASS の合同学会を UW で開催しました。指導教員が学会の企画責任者であったため、Student Volunteer Chair として学会に関わることができました。ハイブリッドの学会を主催するにあたり、予期せぬバグニングが起きましたが、他の企画者と協力しあいながら無事終了することができました。5月に参加した大規模な CHI とは異なり、今回の学会は少人数の学会で ICTD の研究者が多かったため、自分の分野特有なディスカッションに参加することができました。

### V. 最後に

博士課程 1 年目は様々な研究に関わることによって研究テーマを具体化することができました。今後の研究生生活がとても楽しみです。船井財団のご支援にいつも心から感謝しております。これからもよろしくお願いいたします。